

# わたしに問わなかった者たちに、わたしは尋ねられ わたしを捜さなかった者たちに、見つけられた

第160号

イザヤ 65:1

平成21年1月30日

主はモーセとアロンに告げて仰せられた。「イスラエル人に告げて言え。地上のすべての動物のうちで、あなたがたが食べてもよい生き物は次のとおりである。動物のうちで、ひづめが分かち、そのひづめが完全に割れているもの、また、反芻するものはすべて、食べてもよい。しかし、反芻するもの、あるいはひづめが分かち、ひづめが完全に割れていないので、あなたがたには汚れたものである……それに、豚。これは、ひづめが分かち、ひづめが完全に割れたものであるが、反芻しないので、あなたがたには汚れたものである。あなたがたは、それらの肉を食べてはならない。またそれらの死体に触れてもいけない。それらは、あなたがたには汚れたものである……海でも川でも、水の中にあるもので、ひれとうろこを持つものはすべて、食べてもよい……ひれやうろこのないものはすべて、あなたがたには忌むべきものである……羽があって群生し四つ足で歩き回るものの中で、その足のほかにはね足を持ち、それで地上を跳びはねるものは、食べてもよい……いなごの類、毛のないいなごの類、こおろぎの類、ばったの類である……あなたがたが食用として飼っている動物の一つが死んだとき……その死体のいくらかでも食べる者は……夕方まで汚れる……地に群生するものうち、腹ではうもの、また四つ足で歩くもの、あるいは多くの足のあるもの……どんなものによっても、自分を忌むべきものとしてはならない。またそれによって、身を汚し、それによって汚れたものとなつてはならない。わたしはあなたがたの神、主であるからだ。あなたがたは自分の身を聖別し、聖なる者となりなさい……わたしが聖であるから。」 レビ記 11章

今年は「うし年」ということで、ちまたでは牛に関する話題が多く取り上げられています。普段、まず顧みることのなかった牛について今回新たに知らされ、ずいぶん考えさせられることがありました。牛の一生について得た情報（以下、まとめてみました）を、ヘブル語聖書のレビ記に照らして考察してみたいと思います。

(1) 牛は人と同様に、お乳で赤ちゃんを育てる哺乳動物で、母牛は子牛が生まれるとその肌をなめてきれいにしてやり、母乳を飲ませる。出産直後の初乳には病原体に対する免疫が含まれており、初乳は子牛が丈夫に育つに欠かせない最初の大切な栄養源である。しかし、近代畜産では、牛の哺乳動物としての生理や習性は全く無視された取り扱いがなされており、母牛は狭い牛舎で、ほとんど身動きできない状態で出産しなければならず、子牛は初乳を母牛の乳首からではなく、人が絞ったものをバケツから与えられる。

(2) 乳牛は自然にお乳を生産するものと思っている人が多いが、お乳は子牛を産んだあと十ヶ月くらいしか出ない。そこでずっと出し続けさせるために、十ヶ月後くらいに次の子牛が生まれるように、人工的に妊娠させる。妊娠しながらお乳を出し続けなければならないので、貧血で倒れてしまう乳牛もいる。本来なら「牛乳」は子牛のための栄養源のはずなのに、人間が飲むようになったため、子牛は五～十日くらいで母乳から代用乳（人口乳）に切り替えられてしまう。いわば、人間のために子牛は母牛から引き離されるのである。そのため、別れが悲しくて牛の親子は鳴いて訴える。牛にも感情があるのだ。この代用乳にはかつて「肉骨粉」が含まれていたが、日本で発生した狂牛病の原因ではなかったかと指摘されている。「肉骨粉」とは、牛、豚、ニワトリなどの食用部分を取り除いた後の廃棄物や、病気で死んだ動物の肉などを混ぜて粉碎した動物性飼料である。

(3) 雌牛は四回くらい子牛を産むと、肉にされてしまう。生まれた子牛が雄の場合は、肉用にされるため、生後一週間くらいで生まれた牛舎からトラックで運び出される。幼い子牛にとって長距離輸送、環境の激変は大変激しいストレスを与えるうえ、農家では初めから肉用と決まっている雄の子牛には初乳もろくに飲ませないよう、死亡率が極めて高いのである。また牧場で見ると本来ある「角」がないが、これは、生後一ヶ月以内に、「除角」といって、角の生える角根部を電気ごてや薬剤を用いて焼いてしまうからである。子牛は大変な苦痛を耐えなければならないのである。牛の体は、しっぽ一本に至るまで無駄なく、人間の用途のために用いられる。口紅、止血剤、ベルト、靴、鞆、コートはじめ、食肉、乾燥させて燃料用にすく殺菌力の強い糞、薬用にされる尿という具合に、古代から大変重宝されてきたのである。

(4) 母牛は人工授精によってほぼ年中妊娠状態に置かれ、搾乳が中止になるのは、次の子牛出産の前二ヶ月間だけで、残り三百日は搾乳期間である。牛乳は牛の血液から作られ、子牛の成長に必要なミネラル、栄養分を十分に含んでいるため、一日に三回も搾乳、絞り取られると、母体の骨からカルシウムが奪われ、足の骨が弱くなり、立つことができなくなる乳牛もいるという。現実問題として、乳牛はほぼ死ぬまで牛舎につながれたままになるので、運動不足で関節炎を引き起こし、思い体重を支えられなくなると、搾乳も困難になるうえ、トラック

に載せて屠畜(とちく)場に運ぶことすら困難になるため、水や餌を与えず餓死させられることもあるのである。

(5) 牛は草食動物で、繊維質の固い草や葉を消化するための四つの胃があり、反芻しながらゆっくり消化するように生まれついている。しかし、昨今、早く成長させ、急速に肥らせ、もっと多くの乳を絞り取り、早く出荷させ、利潤を得たいという畜産業の営利主義にあおられて、このような牛の生理は全く無視されてしまっている。牧草ではなく、トウモロコシ、大豆、大麦などの穀物を中心とした高カロリーの濃厚飼料が大量に与えられることによって、確かに、乳牛の乳量、乳脂肪分は増大しているが、半面、食べたものが消化できず、胃に停滞したり、異常醗酵したり、消化器障害が起こったりもしているのである。また、粉碎した飼料ばかり与えられているので、牛自体、草を食むという本来の習性が満たされず、口の周りを繰り返しなめたり、餌入れ、柵などをやたらとなめ続けたりという異常行動が起こっているのである。

神は、イスラエルの民が、偶像崇拜と不道徳が蔓延していたカナンへの地に入る前に、モーセを通して荒野で『十戒』を含む613の掟を授け、約束の地で神の民が健全な神権国家を樹立し、周りの異邦人諸国の宗教、慣習に迎合するのではなく、唯一真の神ヤーウェを証していくに必要な指示を与えられました。冒頭に引用した動物の聖俗の区別は、汚れたもの、聖いものと表現されているため、神が動物を差別された印象を与えるのですが、神が動物を儀礼的に分けられた理由は愛の配慮に基づくものでした。たとえば、「ひれとうろこ」を持たない魚は外敵に弱い類のもので、もし食用にされてしまったとしたら、すぐ絶滅の危機にさらされてしまったことでしょう。おそらく掟が「忌むべきもの」と定め、食用にすることを禁じたことによって、守られてきた空、陸、海の生き物は数え切れないほど多いに違いありません。反対に、いけにえや食用に定められた儀礼的に聖いとされた動物はすべて、家畜として人間の保護のもとに置かれることによって絶滅の危機にさらされることのない、人間に従順な動物でした。しかし、従順でありながら、どれもみな、力、栄誉、権威を象徴する「角」のある動物であったということは、究極的ないけにえが、従順な苦難のしもべイエス・キリストであることを、旧約の掟が明らかに指し示していたかのように意義深いものがあります。また、他の動物の死によって生きる肉食獣や手当たり次第何でも餌にする他の雑食性の動物とは違い、「聖い」とされ、いけにえにささげられた動物はすべて、一定の食餌(しょくじ)に依存する草食動物であったということも意義深いことです。肉食獣、雑食性の動物が概して、不衛生なものを餌とし、人間に病気を引き起こす媒体—病原菌、細菌、寄生虫—などを宿らせている動物であったことを考慮すると、神が掟に定められた聖俗の区別が、動物の種類によるものではなく、習性、性質、人間への影響を配慮したものであったことが見えてくるからです。

興味深いことに、神が生き物の聖俗の基準とされた表現から、神の御旨を洞察することができます。もし、「ひづめが分かれている、完全に割れている」ということが、「神の掟に従って歩む神の民は異邦の民と完全に違っている」ということを覚えさせるためのものであり、「反芻する」ということが、「昼も夜もその教えを口ずさむ(瞑想する)」(1:2)と詩篇の著者が語ったように、「神の言葉を何度も何度も反復し消化する」必要を思い起こさせるものであったとしたら、どうでしょう。聖い、食べてもよいとされた動物は、その習性、特徴が、イスラエルの民に神の指示を思い起こさせる動物であったといえるかもしれないのです。

神の掟では、「聖さ」に象徴されているのは一貫して、秩序、いのち、健全、調和であり、「汚れ」に象徴されているのは無秩序、死、不健全、混乱ですが、この概念は人間の墮落にさかのぼるようです。すなわち、神の秩序ある創造を無秩序、墮落、滅びに一転させた罪の結果の病、死はすべて、「汚れ」「忌むべきもの」として分類されることになるのです。したがって、歩く陸の動物、泳ぐ魚、飛ぶ鳥と違って、動きに一貫性のない(秩序のない)爬虫類、両生類、多足類、昆虫(はね足で跳ぶという動きに特徴のある「いなごの類」四種を除いて)すべてを、神は「忌むべきもの」とされたのですが、これらの生き物の習性が「無秩序」に特徴づけられるものであったからでしょう。また神は、死んだ生き物に対する取り扱い方を細かく教えられましたが、聖書は、忌むべきもの、聖いものに関わらず、生き物は死ぬと「汚れ」を運ぶとみなし、その死体や死体が触れた器物に触れることがないようにと繰り返し警告しています。しかし同時に、すべての被造物を尊ばれる神は、動物の死を丁重に取り扱うようにとの警告もされたのでした。

このように、神がご自分が造られた個々の生き物に責任を持ち、細かい配慮をしておられることがレビ記の掟に反映されていますが、上記の「牛の一生」は、神の基準から何と大きく離れてしまっていることでしょう。神が人間の支配下に置かれた動物が、創造の秩序を歪めた人間の利潤追求主義の犠牲になっていることは明らかです。神の掟には「いのち」に対する敬意が反映されていますが、正反対に、人間の動物に対する取り扱い方には「いのち」への軽視が反映されています。このことから、最初の人類の墮落以降、人間が神から離れ、神との正しい関係にないことが明らかなのです。使徒パウロは、「被造物も、切実な思いで神の子どもたちの現れを待ち望んでいる」と、人間の罪の呪いの下に置かれてしまった被造物が、滅びの束縛から解放され、栄光の自由の中に入れられるキリストの再臨のときを待ち望んでいることを語っていますが、キリスト支配の神の国到来という福音、神の側からのご介入がないかぎり、人間の墮落に歯止めをかけることはできないでしょう。